

# 市民プレス

## SHIMIN PRESS

4月5日 第64号

発行人 「市民フォーラム」  
 編集人 原 昭二  
 制作 デジタル工房  
 E-mail hara@camelianet.com  
 TEL 090 (3048) 5502  
 〒353-0004 埼玉県志木市本町 2-4-43

市民の目線で市民が発信する地域情報紙  
**WEB SHIMIN**  
<http://shimin.camelianet.com>

### CONTENTS

-PAGE 1  
**武家政権の行方は・・・その二**  
 一、承久の変と執権政治  
 政権の混乱は続く 後鳥羽上皇の構想  
 北条政子の作戦は成功する

-PAGE 2  
 鎌倉から京都に向けて出撃  
 執権から得宗専制に  
 地頭と荘園 モンゴル帝国の拡大は・・・

-PAGE 3  
 二、鎌倉政権の滅亡  
 天皇親政と内乱の勃発  
 足利高氏の転機

-PAGE 4  
 新田義貞は鎌倉を陥落させる  
 『太平記』と『梅松論』 軍記物語は・・・

### 武家政権の行方は・・・その二

#### 一、承久の乱と執権政治

##### 朝廷との争いが火種となつて

源頼朝の死後、正妻の政子が中核となり、北条氏の力が強化され、朝廷との軋轢が生じた。承久三年(1221)、後鳥羽上皇は、鎌倉幕府に対して打倒の兵を挙げ、承久の乱が勃発した。しかし後鳥羽方は大敗したので、朝廷の権力は弱体化し、武家政権の政治的な発言力が増大する。

##### 頼家は家督を相続したが・・・

遡つて、建久十年(1199)一月、父・頼朝が急死すると、嫡男の頼家は家督を相続して、第二代鎌倉殿となる。時に十八才。頼家は自分の側近を重んじ、乳母一族である比企氏を重用して独裁的な政治を行なおうとした。

##### 比企能員の変

比企氏の当主に当たる能員は、頼家の愛妾で嫡男一幡を生んだ若狭局の父親に当たる。そのため、北条時政は彼を脅威に感じていた。

しかし三ヶ月後の四月、北条氏ら有力御家人による十三人の合議制が布かれ、これに反発した頼家は、小笠原長経、比企宗員、比企時員、中野能成以下若い近習五人を指名し、彼らに手向かつてはならないという命令を出した。

御家人が次々と追放されて・・・  
 そのため、頼朝在世中に抑えられていた有力御家人の不満が噴出し、

御家人が次々と追放されて・・・  
 また時政は、自分の娘、阿波局が乳母を務めた頼家の弟で、十二才の千幡を三代将軍に擁立し、自

##### 御家人統制に辣腕を振るっていた侍

邸の名越亭に迎えて実権を握った。有力だった畠山重忠らの排除によつて、義時が信頼する弟の時房が武蔵国の守護・国司となる。

##### 政権の混乱は続く

正治二年(1200)四月、北条時政は遠江守に任じられ、御家人として初の国司となつた。時政の幕府内における地位は向上したが、将軍家外戚の序列は、北条氏から頼軍家の乳母父で舅である比企能員に移つたので、時政と比企氏の対立が激しくなる。

建仁二年(1202)七月、頼家は征夷大将軍に宣下されたが、同三年、急病に襲われる。この時機を捉えて、頼家の母・北条政子は、祖父・北条時政とともに、頼家の政治を止めさせ、代わつて実権を握ろうとする。

##### 邸の名越亭に迎えて実権を握った。

有力だった畠山重忠らの排除によつて、義時が信頼する弟の時房が武蔵国の守護・国司となる。

##### 三代将軍は政所を整備する

当初は時政や政子、義時の補佐。後見を必要としたが、実朝は、やがて自ら将軍家政所を整備し、幕府の訴訟・政治制度を充実させていった。承元三年(1209)に従三位となつて公家に列すると、将軍家政所下文を発して政所に実権を集め、新しい政策を展開していった。

建仁二年(1202)七月、頼家は征夷大将軍に宣下されたが、同三年、急病に襲われる。この時機を捉えて、頼家の母・北条政子は、祖父・北条時政とともに、頼家の政治を止めさせ、代わつて実権を握ろうとする。

##### 幼い実朝に代わり、時政が単独に署名して、「関東下知状」が発給

幕府における専制を確立し、時政は初代の執権に就く。

##### 畠山重忠の乱

元久二年(1205)六月、有力御家人の畠山重忠は、武蔵国の掌握を企てる北条時政の策謀により、武蔵国二保川(現・横浜市旭区保土ヶ谷区)で、次男の義時が率いる大軍に攻められ、北条氏による有力御家人排斥の一つである。

##### 威・同族と結んで挙兵した。だが、

將軍実朝を擁し、兵力に勝る幕府軍は圧倒的だったので、和田一族は力尽き、義盛は敗死した。

##### 侍所は大きな権限をもっていた

侍所は古く「さぶらいどころ」ともいわれ、「侍い」、すなわち貴人の傍に控え、その身辺を警護する従者の詰所という意味であった。

治承四年(1180)十一月に遡る。源頼朝は富士川で平氏を討つて鎌倉に戻り、和田義盛を侍所の別当に任命した。行事の警備などに当たる御家人の召集・指揮と、罪人の収監などを行なう要職で、大きな権限をもっていた。

##### 実朝は鶴岡八幡宮で落命する

一方、建暦三年(この年十一月、改元されて「建保元年」となる。「百鍊抄」によれば、天変地妖(大地震)が原因とされる)、將軍実朝は昇進を重ね、正三位、従二位、さらに、正二位に昇叙(十二才)された。建保四年には、権中納言に転任、左近衛中将を兼任する。

##### 第四代将軍は・・・

実朝には子がいなかったため、次の将軍として、藤原摂関家からわずかに二才の藤原頼経を迎え、北条政子が後見人となり、「尼將軍」と呼ばれた政子と執権・義時の権力は、ますます強くなった。

一方、後鳥羽上皇は、友好的だった実朝が世を去り、北条氏が実権を握つたため、幕府との関係の見直しを迫られることになった。

後鳥羽上皇の国家構想  
 上皇は自らが国全体の頂点に立ち、公家も武家も上皇に仕えるべきであると考えていた。そこで鎌倉殿に対しては、將軍としてその役割を果たすことを期待した。ところが実朝が亡くなって、武家政権の久記には、政子が館の庭先にまで溢れるばかりの御家人たちを前に涙ながらの大演説を行ったことで彼の心が動かされ、義時を中心に鎌倉武士を結集させることに成功した、と記されている。

例え、後鳥羽上皇が寵愛した女性に与えた荘園があり、そこに幕府から任命された地頭を止めさせた、と記されている。政子の最後の詞は、「故右大将(頼朝)の恩は山よりも高く、海よりも深い。それに報いる心が、浅くて

##### 上皇は院宣を発する

承久三年(1221)五月、上皇は「流鏑馬揃え」を口実に北面・西面武士や近国の武士、大番役の在京の武士千七百騎を集め、京都守護の邸を襲撃した。さらに後鳥羽上皇は、全国の武士に北条義時追討の「院宣」を発した。

##### 後鳥羽上皇の代表(国書)

後鳥羽上皇は承久の乱に敗れ、隠岐に配流される前に出家した。絵師藤原信実に命じて出家前の肖像画を描かせた。『吾妻鏡』に記されている。この像はその絵に写したものという。

大阪府三島郡本町、水無瀬神社所蔵。同神社は、後鳥羽上皇の離宮水無瀬殿の跡に建立され、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇を祀る。



源実朝像  
 山梨県甲府市・善光寺像  
 鎌倉時代の作と伝えられる



源実朝像  
 国文学名家肖像集



後鳥羽上皇像(紙本着色)  
 鎌倉時代の似絵の代表作(国書)  
 後鳥羽上皇は承久の乱に敗れ、隠岐に配流される前に出家した。絵師藤原信実に命じて出家前の肖像画を描かせた。『吾妻鏡』に記されている。この像はその絵に写したものという。  
 大阪府三島郡本町、水無瀬神社所蔵。同神社は、後鳥羽上皇の離宮水無瀬殿の跡に建立され、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇を祀る。



北条政子(法名:安養院)像  
鎌倉市大町・安養院蔵

伊豆の流人だった頼朝の妻となり、武家政権が樹立されると御台所と呼ばれる。夫の死後に落飾(落髪)して尼御台と呼ばれた。法名を安養院。頼朝亡きあと嫡男、次男が相次いで暗殺された後、京から招いた幼い藤原頼経の後見となり、幕政の実権を握り、世に尼将軍と称された。

「政子」の名は建保六年(1218)、從三位に叙されたとき、父・時政の名から一字取って命名されたもので、それ以前の名前は不明。

の中の逆臣=悪い臣下を討ち取り、三代将軍の築いたものを守り通すべきです」というものだった。

演説だけで御家人たちを奮い立たせたという政子は、さすがだが、実は政子は演説の中で巧妙に「すりかえ」を行なって、御家人たちを戦いに導いたようだ。そもそも後鳥羽が発した命令(院宣)の内容は、「義時追討」であって、「鎌倉幕府打倒」ではない。義時(北条氏)さえいなくなれば、鎌倉幕府はつぶす必要はなく、自分が支配に利用できることさえ考えていたようである。

鎌倉から京都に向けて出撃  
大江広元は京への積極的な出撃を主張し、政子の裁決で決定された。素早く兵を集め、軍勢を東海道、東山道、北陸道の三方から京に向けて派遣した。道々で兵力を増強したので、『吾妻鏡』によれば最終的には十九万騎に膨れ上がったという。

敗れた上皇は配流される  
わずか二ヶ月あとの七月、敗れた後鳥羽上皇は、上京した義時の嫡男・泰時によって、隠岐島(隠岐国

海士郡の中ノ島、現・島根県隠岐郡海士町)に配流された。父の倒幕計画に協力した順徳上皇は佐渡島に流され、土御門上皇も自ら望んで土佐国に遷った。さらに、在位わずか三ヶ月足らずの仲恭天皇(当時四才)も廃され、代わりに高倉院の孫が皇位に就き、その父で皇位を踏んでいない後高倉院が院政をみることになる。

また、上皇に味方した貴族・武士の領地に、戦いに貢献した御家人を地頭として任命する権利を得て、幕府の力は畿内・西国まで及び、武家政権優位の体制が確立された。

政治は執権から得宗専制に  
御成敗式目の制定や執権政治の確立によって、基本的な構造が変わり、武家政権は安定していく。そして、その中心となった北条氏の力はますます強まっていき、特に、五代執権・時頼のころからは得宗の勢が強まった。

幕府から任命された地頭は、治安維持や年貢の取り立てなどを行なうようになり、現地では、武力を背景にして、荘園での権益・支配を拡大しようとした。取り立てた年貢を荘園領主に送らずに着服したり、決められた以上の税や労働力を農民に強制したりした。「地の荘園侵略」といわれるものである。毛利氏のように、後の戦国大名になるものもいた。

モンゴル帝国の拡大は・・・  
アジア大陸で大国、モンゴル帝国が拡大し、アジア諸国、諸民族とともに、日本も共通の運命に曝された。鎌倉幕府が経験したモンゴル襲来は、日本が本格的に外国から攻められた大事件とされている。

その後、モンゴル軍が再び攻めてくると考えた幕府は、防衛体制を強め、敵の上陸を阻止するため博多湾沿岸に高さ3メートルの石の防塁をおよそ20キロにわたって築いた。この石塁はいまも博多湾岸に残っている。

その後、モンゴル軍が再び攻めてくると考えた幕府は、防衛体制を強め、敵の上陸を阻止するため博多湾沿岸に高さ3メートルの石の防塁をおよそ20キロにわたって築いた。この石塁はいまも博多湾岸に残っている。

幕府は、京都守護に代わって六波羅探題を置いて朝廷を監視し、治天の君を戴く京都の公家政権と交代して、皇位継承をはじめ朝廷の政治に干渉するようになる。

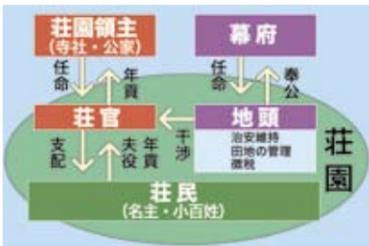
また、御家人の所領に関すること、武士の道徳、守護・地頭の権利と義務、裁判、家族制度などを明らかにして、貞永元年(1232)八月、『御成敗式目』(裁判の法令)を定めた。のちに『貞永式目』と呼ばれ、武家法の基本となる。

幕府は、京都守護に代わって六波羅探題を置いて朝廷を監視し、治天の君を戴く京都の公家政権と交代して、皇位継承をはじめ朝廷の政治に干渉するようになる。

朝鮮半島に侵入  
1231年以降、モンゴル軍は朝鮮半島の高麗に繰り返し侵入、1259年、高麗は遂にモンゴルに従う属国となる。

1260年にモンゴル帝国の皇帝となったフビライは、中国の北半分を押さえ、現在の北京の地に大都という都を築いた。1271年には国号、国の呼び名を中国風の「元」に改め、皇帝フビライは、中国の南半分を支配していた南宋を征服しようとした。また、東の海上に浮かぶ日本国をも視野に入れる。

宮内庁所蔵 前巻、絵七。(文永の役) 矢・槍・てっはの飛び交う中、馬を射られながら蒙古軍に突撃する竹崎季長と、応戦・逃亡する蒙古兵(註)この季長苦戦の場面には、あとから加筆された箇所があると思われる。特に三人のモンゴル兵を他の場面のそれと比べて分るのは、季長の奮戦ぶりを強調したかったためであろう。



例えは武蔵国の片山氏は・・・  
承久四年(1222)、片山右馬允(広忠)は、承久の乱における勲功賞として、丹波国の荘園、「和知荘」(現・京都府船井郡丹波町)の地頭に補任(職に任命)される。彼は武蔵国新座郡片山郷を名字の地とし、移住した後も関東御家人として、片山郷に本領を持ち続けていたが、一方、新領地の経営に努め、下地や荘民への権限拡大を図っていた。この地は京都府のほぼ中央に位置し、山林で覆われているが、片山氏は未墾地の開発を行なって勢力を蓄え、丹波の国人領主へと成長した。

1267年の末、モンゴル帝国・フビライの国書を携えた高麗の使者が、日本の対馬にやってきた。その内容は、日本と友好関係を結んで交流したいというものだったが、「できるだけ武力は用いたくない」ときるだけ武力は用いたくない」と書かれていた。

この国書に警戒感を抱いた鎌倉幕府では北条時宗が執権となり、防衛体制を整えてゆく。

1270年、朝鮮半島の高麗で国内の反乱鎮圧などのための臨時に編成された『三別抄』とい



まず執権の補佐役として連署を設け、また、御家人の中から評定衆を選び、執権・連署と合わせた八代執権・時宗のころ、得宗の権力は大きなものとなる。

地頭と荘園  
地頭とは、頼朝が荘園や公領に置いたものであるが、もともと荘園には、荘園領主から派遣された荘官がいて、荘園を管理して年貢を領主に送っていた。

承久の乱で上皇に味方した貴族・武士の所領(荘園・公領)は取り上げられ、幕府の御家人が地頭として任命された。その所領の多くは西国にあつたので、幕府の力は西国に及んでいった。

幕府から任命された地頭は、治安維持や年貢の取り立てなどを行なうようになり、現地では、武力を背景にして、荘園での権益・支配を拡大しようとした。取り立てた年貢を荘園領主に送らずに着服したり、決められた以上の税や労働力を農民に強制したりした。「地の荘園侵略」といわれるものである。毛利氏のように、後の戦国大名になるものもいた。



弘安の役

元は1279年、南宋を滅ぼし、中国全土を支配下に収め、中国南部の貿易都市・泉州などで、日本を再び攻めるための軍船を作り始める。弘安四年(1281)、高麗から東路軍四万が、また中国の沿岸からは江南軍十万が日本へと出発した。

六月六日、まず東路軍が福岡の志賀島に上陸。ここで幕府が作らせた石の防壁が効果を発揮したため、東路軍は本格的に上陸することができず、一度は退いた。七月、ようやく江南軍が到着、東路軍と合流して長崎県島原付近に集まった。

しかしその時、暴風雨が艦隊を襲い、多くの船が沈没。元軍の兵士が襲いかかり、元や高麗の兵士たちを倒していった。十四万ものモンゴル軍のうち、生き残った者は、三万数千人に過ぎなかったといわれている。

モンゴルに勝つたのは・・・

(1) 日本側の小舟によるゲリラ的な戦術と防壁、(2) 東路軍・江南軍の船が粗悪で、互いの連絡が悪かった、(3) 暴風雨に襲われた「神風」が吹いたのでは、などの要因によると思われるが、御家人の奮闘は顕著で、命をかけて戦ったのは恩賞が目的だったようだ。

竹崎季長は、裁判で敗れて土地・財産を失ない、困っていたので、永の役で手柄を立て、所領を手に入れることを目論んでいた。ところが、勇敢に戦ったのに、その手柄が鎌倉にきちんと報告されていなかった。そこで季長は文永の役の後、恩賞奉行の安達泰盛に直訴し、その甲斐があつて故郷近くの地の地頭に任じられた。

季長は次の弘安の役でも活躍し、極的に支援した。弘安の役の翌年、弘安五年(1282)のことになる。北条時宗は、文永・弘安の役で犠牲となつた敵味方の兵士の霊を慰めるため、中国から来日した禅僧・無学祖元に、「円覚寺」を創建させた。医療施設をもつた「極楽寺」

一方、律宗のように、社会事業に力を入れる宗派もあつて、二代執権北条義時の三男、重時が開基したと伝えられる「極楽寺」には、境内に病室などの医療施設が建てられ、数多くの病人を治療していたといふ。

大なる寺院の全体を描いた「極楽寺境内絵図」が残されているが、記録や伝承などをもとにして極楽寺の盛時の姿を偲び、江戸時代に作成されたと伝えられている。

泰盛の路線は、得宗家の家臣の代表だった内管領・平頼綱との対立を生み、また、非御家人を組み込むことには御家人の反感もあつて、泰盛は孤立した。弘安八年十一月(1285)、安達泰盛は一族と共に滅ぼされ、全国で泰盛派が弾圧された。十二月、霜月に起こった「霜月騒動」と呼ばれている。

仏教の新しい動きが活発に。当時、京都と並ぶ政治の中心地だった鎌倉では、宗教活動も活発に繰り広げられていた。円覚寺の創建。幕府は、中国から伝えられた禅宗、特にその一派である臨済宗を積



国宝「一遍聖絵」第五巻より  
北条時宗に鎌倉入りを阻止される。

「一遍上人絵伝」(一遍聖絵) 時宗の開祖、一遍を描いた絵巻で、奥書によれば、正安元年(1299)の弟子にあたる聖戒が詞書を起草し、法眼の地位にあつた画僧の円伊が絵を描いたという。神奈川県藤沢市・清浄光寺蔵(京都・歡喜光寺旧蔵)。

の中枢となつた評定衆などを、また地方では守護の要職を北条氏二門が占める。得宗家の力は強大なもので、得宗の家臣が政治を勝手に動かす事態となり、また、得宗家の領地も拡大していった。

そのために、御家人の不満が高まり、最後の得宗・北条高時のころ、得宗家の御内人・内管領の職にあつた長崎円喜・高資父子は実権を握っていたので、その力への反発から、政権は御家人の支持を失い、長崎父子は政権崩壊の悪役として後世に名を残した。

二、鎌倉政権の滅亡

「悪党」の活発化。モンゴル襲来の後、社会は変動し、混乱の世相となる。当時の史料を見ると、正安・乾元(1299)のころ、各地で、海賊や強盗、山賊が、十人、二十人、城に籠り、荘園領主や幕府に武力で対抗したことが記されている。支那側からは「悪党」と呼ばれていた。正中・嘉暦(1324)のころ、八十八代後醍醐天皇の第

皇位継承の争い。このころ天皇家は、皇位継承を巡って、持明院統と太皇太后統と二つの系統が対立するようになった。二つの系統が鎌倉政権に正当性を認めるよう働きかけたため、幕府は、両統が交代で天皇となることを提唱した。これを両統立派(りょうとうりゅう)という。八十八代後醍醐天皇の第

こうして、後伏見、後二条、花園と天皇が交互に即位し、「持明院統」の花園天皇の次に中継ぎだった後醍醐は、「大覚寺統」の後二条天皇の第一皇子、邦良親王を皇太子とした。ただし、正中三年(1326)に邦良親王が亡くなったので、その子、量仁親王(後の光厳天皇)を皇太子とした。しかし、後醍醐天皇は我が子に皇位を継がせたかった。正成は、河内国南部の山間にあ

再び拳兵したが敗れて隠岐に。元徳三年(1331)八月、再度の倒幕計画が側近の密告によって発覚した。厳しく追及された後醍醐は、「元徳」から「元弘」へと改元して詔書を下した。しかし幕府はこれを認めず、「元徳」の元号を使い続けた。後醍醐は身辺に危険が迫つたため、急遽京都からの脱出を決断し、三種の神器を持つて拳兵する。はじを汲む足利高氏は、平氏の後裔と自称しながら「鎌倉殿」を引き継いだ北条氏に反感をもち、何時の日か、自ら幕府を開くことを考えていたのではあるまいか。

四月、集中的な攻撃を受けた名越高家は敢え無く戦死を遂げる。勅命を受けた高氏は、後醍醐の誘いを受け入れ、天皇方につくこと

を決意し、所領だった丹波国篠村

